

【文学部日本文学科】

筆記試験

解答例（解答のポイント）

※公開する解答例には、別解がある場合があります。

問1

「経にけり」の「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形で連用形に接続し、「経」はハ行下二段活用の動詞であるため、連用形は「へ」であるから「へ」と読む。

問2

亡き子のことを瞬時も忘れられないので詠んだ和歌だとしながら、和歌では亡くなった子のことを忘れるために忘草を摘みたいとしているので一見矛盾しているとも見えるが、忘れてしまいたいということではなく、恋しい気持ちをしばらく休めて、再び恋しのぶ力としようとしているのだと、補足説明をする役割を果たしている。

問3

傍線部（3）は海を荒らし、物をほしがって鏡などの捧げ物によって鎮まる世俗的な「神」の性格を示し、傍線部（4）は「住江」「忘草」「岸の姫松」などのことばを用いて歌われる優雅な「神」の性格を示している。

問4

経験をしたことがない荒天だから、船が沈むか、雷が落ちるか、神の助けがあれば南海に漂着するかのいずれかになるだろうが、仕えている主人が情けないから、不本意な死に方をしなければならぬよということ。

問5

大納言は、最初、自分の弓の力をもってすれば龍を簡単に射殺することができるかと自信満々であったが、龍を探し回り、筑紫で激しい風と浪が起こって船が翻弄され、雷が落ちかかる状況に遭遇すると、こんなに苦しい目にはあったことがないと動揺し、楫取の意見を聞くが、楫取の頼りないことばになおさらうろたえ、楫取のことばに従って、龍を殺すことを諦める旨の誓いを立てながら祈りを捧げるほど自身のふるまいを後悔し、楫取の状況が好転しているとのことばさえも聞き入れることができないほど絶望した。

問6

文章【A】では、風や波によって船が進まないとして住吉の明神がほしいものがあるとして、幣のほかに鏡を命令口調で求められ、反発をおぼえながらもそのとおりにすると海が鎮まり、文章【B】では、荒天のために大納言のせいで死ななければならないと遠慮のない態度をとられたうえに、神に祈ることを命じられてそのとおりにすると海が鎮まるというように、尊大であるが従わざるをえないものとして描かれている。